

歌林拾葉集

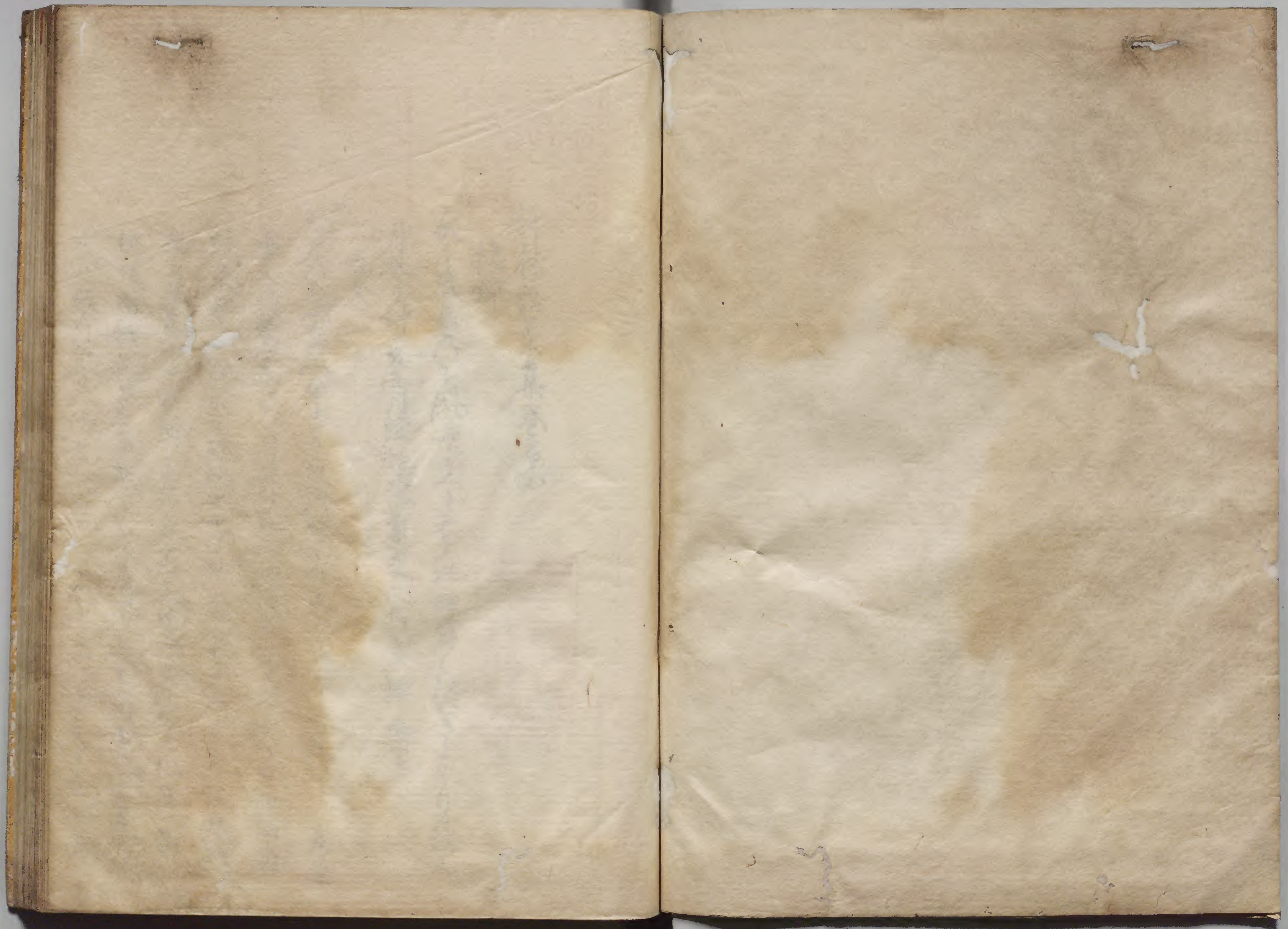
四六

和書門			
二八二五六	號	類	
八六	函		
三	架		
四	冊		

內閣文庫			
二八二五六	號	類	和書
一四	冊		
一	函		
二	架		

內閣文庫	
番號	和 28256
冊數	4 (2)
函號	201 5





明治十五年 晴來

愛岳麓藏書



詩林拾葉集卷第四

秋蟬

夜久其聲乃上風吹之空江蟬の秋ささり物成

月令云仲夏之月蟬始鳴季夏之月寒蟬鳴

七夕

七夕乃わつばなをささりて其のささりては



事文類聚十卷曰七月初七其夜洒掃於庭露施乞延設酒脯

時果散分粉於河鼓織女星神當會守夜者成懷私願

或云見天漢中有奕々正白氣有光曜五色以此為徵應見塔

便拜而願乞富乞壽無子乞子唯得乞不得無求三年乃

言之頗有受其作者上云云

蜘蛛網^{チウゴウワ}之七夕婦人結綵縷^{ヒサイレヲツカフ}穿七孔^{セツクツ}針或以金銀^{チウゴウ}石為針^ト津^ツ
 丸果於庭中以乞巧^{クキウ}有蟾子^{チンシ}綢於瓜上^{ウリノカミ}則以為得巧^{クキウヲ}今也
 諸衣肢樂器^{カクキ}何^{ナニ}也^{ナリ}也^{ナリ}也^{ナリ}
 續齊諧^{シキキ}謂^{イフ}桂陽城^{ケイヤウ}武丁^{ブチ}有仙道^{センドウ}謂其弟^{イハヒ}曰^{イフ}七月七日織女^{オリメ}
 當渡河^{カガハ}諸仙悉還宮^{ミヤニ}弟問^ト織女何事^{ナニニ}渡河^{カガハ}答曰^{コタヘテ}
 織女暫詣^{ヒトシラフ}牽牛^{ケンウ}世人至^{ヒト}入^{イリ}之^ノ織女嫁^{カス}牽牛^{ケンウ}云^{イフ}
 かくの〜是と又〜あり
 五雜俎^{イハヒ}曰^{イフ}
 牛女之事始於齊諧^{シキキ}成武丁之妾^{メカケ}言成於博物志^{ブツツシ}乘^ノ
 槎^カ之浪^{ナミ}說千歲之婦人女子傳^{ニシテ}為^{シテ}只實可也^{シテ}文人墨^{ボク}
 士^シ乃習^{シテ}為^{シテ}常語^ト使^{シテ}天上列宿^{テンノウキョク}橫^{ヨリ}被^レ汚^レ蟻^{アリ}不^レ亦^レ可^ク
 恆^{トシ}之^ノ甚^ク耶^ヤ云^{イフ} 私^シ云^{イフ}七夕^{セツシ}乃^{シテ}事^ト妄^{マカ}語^ト也^{ナリ}云^{イフ}

説あり〜古^コ是^レ事^ト流^ル不^レ了^ス改^メ之^ノ雜^ツ於^ニ理^ニ
 論^ロ者^ノ可^ク破^レ乎^ヤこれ^レも^も和^ワ奇^キ乃^{シテ}道^ノハ^ハあり^レ也^{ナリ}
 一^ニ當^ル初^メ〜好^ク吉^クト^モ見^ル事^ト乃^{シテ}今^ノ更^ニ
 あり^レ也^{ナリ}〜
 多^ク〜
 琴^{コト}〜
 白^ク〜
 杖^{ツエ}乃^{シテ}燈^ト江^ノ以^テ弟^ト八^ツ卷^ノ云^{イフ}乞^ク巧^ク奠^ト立^テ黑^ク漆^ト燈^ト其^レ臺^ト九^ツ
 本^ノ謂^フ之^ヲ九^ツ〜
 七夕^{セツシ}此^レい^ハ〜
 赤^ク人^ト

いそぐハ五百機也数乃多事也

漢武帝張騫を遣はして天竺の源を尋ねしむ。則婦

又機を多し前より見一丈夫牽牛諸次飲之織女

曰早晩一人とて青圓石とありては東方朔

曰是ハ七夕ノ支機石也とて圓機活法詩学一卷

曰昔有人尋河源見一婦人浣紗問曰此何所天河

也乃與一石而歸問嚴君平君平曰此織女支機石

也云々机より衣ハ七夕乃を修衣也云々但暮秋の

奇なる事也机之行心も奇なりなり

五 天行く地ゆるりしまじりといふぬきしむ也 弱朝

天河詩云倬彼雲漢為章于天 注云倬大也雲漢

之在天其為文章猶天

子法度 於天下 物理論云星者元氣之英漢水之精也氣發

而升精華上浮宛轉隨流名曰天河一曰雲漢衆

星出焉云々 一一年々々一夜會也故

六 鳥の事乃の心より名をすまはれりは後頼

白居易長恨歌云臨別殷勤重寄詞詞中有誓兩

心知七月七日長生殿夜半無私語時在天願作比翼

鳥在地願為連理枝云々 比翼 山海經云山

吾之山有鳥焉其狀如鳧而一翼一目相得乃飛

名曰蠻見則天下大水注云比翼鳥也色青赤不

比不能飛云々

連理枝樹一校相向連接脉理

而生為連理枝之奇の心これ又してしつゆ
 納殿ナドくこれしつゆめけて七夕つるものかよゆわ何意日
 七夕つる古語拾遺云令天棚機姫神織神衣所
 謂和衣也七夕つるもの事也まじりて五音相通也
 納殿ナド一乃其物と納りてしつゆ也内藏寮司之也
 禁中乞巧奠之事

江次第八云兼日行事藏人令成迎文令催雜役
 雜色以下當日掃部寮鋪葉薦於清涼殿東庭
 當南才其上鋪長筵東西内藏寮官持雜器奠
 三間物候仙華門外雜色以下傳取供之朱漆高机四
 脚立筵上東西脚在之脚東南其東南机南書居菓子小
 在南相並生之

- 一杯 梨東 一杯 桃
- 一杯 梨瓜 一杯 菓子
- 一杯 然面邊式北 北書居酒杯一口
- 一杯 大角豆 一杯 大豆
- 一杯 薄地 或説加于鯛

以上並尾張青瓷有朱漆華盤

西南机上西北机居香鑪一口右南納殿百和香四兩

盛之居朱彩花盤一口在東在東盛神宗花房置楸葉

一技在東押金針七銀七件針別七孔以五色絲差合貫之裏

天何此別其事家々婦結歲時記七月七日牽牛織女會

為針設瓜菓於庭中以乞巧有蟬子羅於瓜菓上則以為

可怪之東北机同上但自御所申下筆一張置東

北西北亦机上北書定喜十五年筆裡書云立柱有

三樣常用半呂半律秋調子也立黑漆燈臺九木
 於伴扎四方四角中央如打敷謂內藏寮供御燈明
用上器件中央燈明有兩說或向北或向御前召內侍
 所粉五合散扎上及筵上立御倚子於庭中或無
 為覽二星會合臣殿上侍穴親之藏人取御挿鞋
 袞候鋪座於河竹ウケテノ臺東為雜色以下袞候座可式
候南廊壁下云々或有御遊御作文等事事ヲ引テ給祿及
 曉更撤之事了下格子ヲ雖逢朔猶
諒園時猶祭天曆
內裡穢時猶應和
 雨濕時設於シニ壽殿西庇下

行事藏人終夜束帶監臨候小板敷雜色以下亦
 終遁檢知之束帶云々

七夕乃ありてしるがまは海は天は川是乃ちちりてしるがまは經信
 余古海 迺是也此奇乃心昔七夕此浦之水
 ちりてしるがまは海は天は川是乃ちちりてしるがまは經信
 唯浴此也又天河海云々云々也

張華博物志云天河與海通海濱年々八月有浮
 槎注云槎水往來不失期博望候張騫乃多齎
中浮木也糧食乘槎而去忽々不覺晝夜奄至下處見城郭居
 室望室中多見織婦見一丈夫牽牛諸次飲之騫
 問之此火何由至此騫乃問此何所答曰可往蜀問

嚴君平乃如其言君平日某年月日有客星犯斗牛
即汝到天河也 海に天河よせしるもこの
古事ありぬかきりけり也

いふにきてて海に草なるありんやとてさし人思西行
此草乃鳥とてりて硯にありて奇なりかきり
七又よりの向ふあり奇の心あるなり

九 いふ早れ天乃岩舟ありとてこのゆいそ花も顯伴

天岩舟 日本記第三卷云 厠於鹽土老翁曰東有

養地青山四周其中亦有乘天磐船飛際者余謂

彼地必當是下畧 天岩舟奇なりとて心あるなり

こゝろのこゝろの早れ物なりとてゆいそ花も顯伴
建元院
古京矣

鹽

是も此夜鹽水とていれ早れ物なりゆいそ花も顯伴
牛織女は會合とてんこ也

十 七夕乃てぬ其もろんやとてさし人思西行

淮南子鳥鵲填河成橋度織女 古詩曰河流清

淺鵲成橋云 奇乃心別あり

萩

十一 理りや好む其もろんやとてさし人思西行

萩の月ハ禁裏乃市房也清涼殿あり萩の月萩の月

十二 不限萩色秋草花皆萩哉とて奇心あり也

浪あゝ萩の萩とてりんゆいそ花も顯伴

浪あゝ萩の萩とてりんゆいそ花も顯伴

浪あゝ萩の萩とてりんゆいそ花も顯伴

説文日出於蜀者為上三此乃其蜀國之白也
六帖云蜀成都有濯錦之池云此心之錦也
とそれとよある也 野嶋崎法路也

とてぬ山ありて勢入りて帝衣とて雲其女のほろ宗尊
此奇 朗詠集云 花色如蒸栗俗呼為女郎戲
國名為寶曆順 ともは山よありて

いつる萬葉の奇とかな奇とよありて

薄

三 かのりてまねたはあす凡 神のくまはた夕れ為家
此奇 万葉集云 元明天皇自飛鳥宮下奈良
都遷ますす時 志貴王子

婦人れ神のくまはた夕れ為家
此奇とゆふとよありて

五 此奇とゆふとよありて
白くはまふらりいとふりさし離るるは小長明
すす不ハ真模芽也徳赤く色多くと色也ハ助意
夜もは月乃光とすまふ海月まを母のあよそふハ西行
此まて不ハ真麻也亭北とて極うと奇ありて
すす不ハ

蘭

六 蘭のさあれ麻かひりさあれと思ひ登蓮
此奇 左傳云 鄭文公妻燕姬夢得蘭生子則
名蘭穆公是也 朗詠集直幹詩云夢斷燕

姫曉枕薰カウシ云々此心ココロなり

又勸善書云唐妙寂尼夢草蘭ミコ字ナリと云々

我親夫人ワカクニありと報ウケり事あり則蘭ナリと云々也

此コノ改事カクシ此コノ奇キなりと云々なり

蘭ナリノリ其ミ甚シトクナリト云々ナリ其ミ神カミノミ像ゾウ

此コノ奇キ白氏文集ハクシ第ダイ十七ジチ云ク蘭ナリ者シヤ花ハナ時トキ錦帳キンテウ下ノ

蘆山アソ雨アメ夜ヨ草庵ソウアン中ノ此コノ心ココロなりナリ蘭ナリ者シヤ三サン本ポン朝チウ

太政官也此詩コノノミ心ココロ奇キなりナリ心ココロなりナリ

多タクク文集ブツ始終シウジウ之ノ詩シノミ心ココロハハカカククナリナリ文集ブツ曰イハク

蘆山アソ草堂ソウドウ夜ヨ雨アメ獨宿ドクシュク壽牛シウニウ二ニ李リ庚ケイ三サン十二ジニ身ミ外ガイ丹タン

霄ヒラ推ツカノキ手テ三サン君子クニノ白髮ハクハツ垂ス頭カミ一ヒト病ヤメ翁オウ蘭ナリ者シヤ花ハナ時トキ錦キン

帳テウ下ノ蘆山アソ雨アメ夜ヨ草庵ソウアン中ノ終身シウシユ膠カウ漆シツ心ココロ應オウ在ニ半路ハンロ雲泥ウンニ

迹ツト不フ同トウ唯タカ有ユ無ム生シユ三昧サンマイ觀カン榮エイ枯コ一ヒト照シウ兩リウ成セイ空クウ

雖スレ然ニ句ク中ノ蘭ナリ者シヤ之ノ連レン句ク板イタ出デ一ヒト其ミ心ココロなりナリ

奇キなりナリ其ミ神カミノミ像ゾウ也ナリ

六ム蘭ナリ者シヤ乃ナリ奇キなりナリ其ミ神カミノミ像ゾウ也ナリ

詞シ書ショ老菊ラウキク裏ウラ蘭ナリ兩リウ三サン葉エフとナリあり

言コトハハヨクククナリナリ其ミ神カミノミ像ゾウ也ナリ

其ミ神カミノミ像ゾウ也ナリ其ミ神カミノミ像ゾウ也ナリ

其ミ神カミノミ像ゾウ也ナリ其ミ神カミノミ像ゾウ也ナリ

其ミ神カミノミ像ゾウ也ナリ其ミ神カミノミ像ゾウ也ナリ

苑エン嵐ラン推ツカ紫シ後ゴ蓬ホウ萊ライ洞ドウ月ツキ照シユ霜シユウ中ノ此コノ詞シとナリ取トル

此等事... 此等事... 此等事... 此等事...
 夫木脚書、文集云前頭吏有蕭條物老菊衰
 蘭兩三襲とあり此等事... 此等事... 此等事...
 若ん人乃... 此等事... 此等事... 此等事...

此等事... 此等事... 此等事... 此等事...
 日本記仁德天皇卷云兒道稚親王應神天皇崩御
 之時兒道稚親王讓位時兒道稚親王認大鶴鶴
 天皇夫君天下以治萬民者益之如天客之如地上
 有驛心以使百姓百姓欣然天下安矣今我也弟之
 且文献不越何敢繼嗣位登天業乎大王者風姿

岐嶽仁孝遠聆以齒且長足為天下之君其先帝立我
 為太子豈有能老字唯愛之者也亦奉宗廟社稷
 重事也僕之不佞不足以稱夫昆上而季下聖君
 而愚臣古今之常曲願王勿疑復即帝位我則為
 臣之助耳大鶴鶴尊對言先皇謂皇位者一日之
 不可空下畧

此等事... 此等事... 此等事... 此等事...
 此等事... 此等事... 此等事... 此等事...
 此等事... 此等事... 此等事... 此等事...

也也... 守賊見也

此奇 日本記十一仁德天皇卷云三十八年秋七月天皇

與皇后居高臺而避暑時每夜自免餓野有聞

鹿鳴其聲寥寥亮而悲之共起可憐之情及月

盡以鹿鳴不聆爰天皇語皇后曰當是夕而鹿不鳴

其何由乎明曰猪名縣佐伯部獻苞苴天皇令

膳夫以問曰其苞苴何物也對言牡鹿也問之何

處鹿也曰免餓野時天皇以為是苞苴者必其鳴

鹿也因謂皇后曰朕比有懷抱聞鹿聲而尉之今

推佐伯部獲鹿之日夜及山野即當鳴鹿其人

雖不知朕之愛以適逢獲不得已而有恨故佐伯
部不欲近於皇后乃令有司移卿于安藝淳田
此今淳田佐部之祖也 俗曰昔有一人往免餓宿
于野中時二鹿卧傍將又鷄鳴牡鹿謂牝鹿曰
吾今夜夢之白霜多降之覆吾身是何祥爰
牝鹿答曰汝之出行必為人見射而死即以白鹽
塗其身如霜素之應也時宿人心裡異之未及
昧爽有獵人以射牡鹿而殺是以時人諺曰鳴
牡鹿矣隨相夢也 云々此心をさるる也
鴈

草... 色... 入道

此奇 古文後集 秋風辭 秋風起兮白雲飛

草木黃落兮雁南歸 此心之

九畝 此奇 其心之 雁南歸 此心之

此奇 蘇武雁書 雁書 雁書

蒙求云 前漢蘇武字子卿杜陵人武帝時以

中郎將持節使匈奴單于欲降之迺出武置木

窖中絕不飲食天雨雪武卧齧雪與羶毛并咽之

數月不死匈奴以為神乃從武北海上使牧羶

乳乃得歸武杖漢節牧羊卧起操持節旄盡落

昭主立匈奴與漢和親漢求武等匈奴詭言武

死常惠教漢使者言天子射上林中得雁足有係

一高書言在某澤中由是得歸拜為典屬國云

雁啣蘆 淮南子云雁從風而飛以愛氣力銜

芳而飛以避繒繳 雁從風而飛以愛氣力銜

之獲本奇也奇凡心列之

此奇 柳花指 此奇 柳花指 此奇 柳花指

此奇 蕙蔭水暗螢知夜揚柳風高雁送秋許渾

此詩乃心詞

稻負鳥

秋の月あるをよみては風はあふりて

とわんとのありてはあふりてはあふりて

あふりてはあふりてはあふりてはあふりて

視つては其の心も亦たわづらひしやうも鳥けりては行家
の心も鳥けりてはわづらひしやうも鳥けりては行家
其解をさす 不文白

枯田

楠より我家の門をわづらひてはわづらひては行家
萬葉集抄云 楠井りては乃家六 楠守部家
書則楠守一人と心也一人の心も新羅人
と心も新羅人一人の心も新羅人一人の心も新羅人
名也と心も新羅人一人の心も新羅人一人の心も新羅人
侍人一人の心も新羅人一人の心も新羅人一人の心も新羅人

月

九五

入道
豊棋雲入日
此の心も鳥けりてはわづらひしやうも鳥けりては行家

此の心も鳥けりてはわづらひしやうも鳥けりては行家
此の心も鳥けりてはわづらひしやうも鳥けりては行家
此の心も鳥けりてはわづらひしやうも鳥けりては行家

鮑胎詩詠新月云 始見西南樓鐵々如玉鈎

未映西北隅娟々如娥眉
此の心も鳥けりてはわづらひしやうも鳥けりては行家

此の心も鳥けりてはわづらひしやうも鳥けりては行家
此の心も鳥けりてはわづらひしやうも鳥けりては行家
此の心も鳥けりてはわづらひしやうも鳥けりては行家

しつて月とせんぬとてあり

七 ^{共七} といふに霞ありと云ふげううおこし月なるもはる月

西乃ありしに教主阿弥陀佛也月と云ふは阿弥陀佛

石に脇士塚立其昔淨也奇れ心あり佛とていふは

其乃もうたぬといふくさひる月れもやあるや

うりては夜月也則十五日阿弥陀乃三日とす也

是又方便門也直説八日之中道月之中道と佛日と

六 ^{共六} ちつとつとつと

山のそれありて天系とける光んていふは板屋

萬葉集第六卷云 月別名曰佐散良衣壯子也

依此辭作此詩云云其心ハハの也

九 ^{共九}

いふるりこいふる月よりわんはれわらう心いふるは

堂光兼月といつる詞よりあり此語佛教をいふも

わんていふるれと證道奇なるもいふるなり較背

肩よりいふる心也奇れ心十五夜月れあり

六月をあらうつる堂乃心いふるいふるなり

やせんといふぬらうなり

池水月送るいふる一夜もぬらういふるなり ほ辰 全真

此奇判者清輔初信云文集の何れなる也

鳳凰池上月送我過商山と心ありいふるなり

あぬもかれはつとてや此池あり月と

すかあらしはさうらういふるもあひて出れ

乃月々...
家...
此奇...
里外皆...
此文乃心...
白多...
此奇...
長從...
遣...
夫婦...
斯人...
此奇...
遂踰...
此...
此奇...
社記...
隅...
辛嶋...
神...
諸國...
又第...
放生...

順德院

天高秋月

八月十五夜

乃月々...
家...
此奇...
里外皆...
此文乃心...
白多...
此奇...
長從...
遣...
夫婦...
斯人...
此奇...
遂踰...
此...
此奇...
社記...
隅...
辛嶋...
神...
諸國...
又第...
放生...

乃月々...
家...
此奇...
里外皆...
此文乃心...
白多...
此奇...
長從...
遣...
夫婦...
斯人...
此奇...
遂踰...
此...
此奇...
社記...
隅...
辛嶋...
神...
諸國...
又第...
放生...

第六十七代後三条院延久二年八月十五日自今
年上卿以六衛府馬寮准行幸扈從御輿
こまきし心するべし法の場ミとられしすまら
放生會乃心也八幡大菩薩よりしりき事こほ
る事しりきされゆ

君よりしりきされゆれ被るれ杜陵中月よりあぬ人
とる人しりきされゆれしりきされゆれしりき
也る人しりきされゆれしりきされゆれしりき
てありしりきされゆれしりきされゆれしりき
乃心也もしりきされゆれしりきされゆれしりき
しりきされゆれしりきされゆれしりきされゆれ

深甚傲妙升奇あり

ホ二 子中 月志れし心おるるもおやまへけし
之の心ハ 狩人ハ 藤人ハ 藤人ハ 藤人ハ
うらまらりしりきされゆれしりきされゆれしりき
おれかられしりきされゆれしりきされゆれしりき
これおるるしりきされゆれしりきされゆれしりき

ホ三 ねらりし月志れし心おるるもおやまへけし

此等或説云 張衡靈云 昇得不死藥於王母婦
娥竊之以奔月 此故事なり 我云此故事
相するなりしりきされゆれしりきされゆれしりき
婦嫁を事しりきされゆれしりきされゆれしりき
三神詩も八月宮に

何、愚業行取る物語ありけり此書に
し、羽計もさしめし八月十六夜月を
よせよへしとせしめしるひのいふ人
よきと侍の

ありのそしる 神璽乃事也三種神器乃二種也

古来説々多し 一説云日本記曰天照太神乃賜天

津彦火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙釵

三種寶物云々 秘注云八坂瓊曲玉云神璽

八咫鏡 日本紀云天照太神天石窟入給時諸神

憂之乃使鏡造部遠祖天糠戸者造中畧而以鏡

其石窟者觸戸小瑕其瑕於今猶存云々

草薙釵 同紀云是時素戔嗚尊自天降而到於出

雲國敷之川上中畧大蛇斬給時至尾釵有是則

草薙釵也

一説三種神寶或二種也 古語拾遺曰以八咫鏡及

草薙釵二種神寶授白王孫永為天璽

一説元々集曰神寶三種或二種矛玉自從又有踐

祚之獻神金鏡釵之文是乃玉從之義也

一説神金如漢金天子之印也

一説早蟻ナス忍神ノ形ト

一説順徳院御記曰神金自神代丁今不替壽永

霧

初ハチ々々貴キのれレのノあハのノ山ヤマ栲ク多タかカりリすスはハ秋
山栲草名也 此奇本院大匠前前裁裁合合とあり
山栲ハ其實其實赤赤く倍倍々々也也小小栲栲子子と云云也也かかんんそそここ此
時時流流乃乃具具るる々々々々用用るる也也

露

小小葉葉亦亦赤赤糸糸れれののああのの山山とゆゆ心心ちちすするる西西行
此奇ハ崑崙山崑崙山之事事とあり 事事文文類類聚聚曰曰
崑崙山皆玉石也則流河三有一曰白玉河有城東
三十里二曰綠玉河有城西三里三曰馬玉河有綠玉
河西七里其原雖一而其玉隨地而變故其色不

向水大剛玉隨流而下奇心分明也

蟬ハチのノ生シるルのノ心ココロのノあハのノ山ヤマ栲ク多タかカりリすスはハ秋
此奇 文集云 相思相思夕上夕上松松臺臺立立蒼蒼思思蟬蟬聲聲滿滿耳耳秋

此詩乃心詞とあり奇心分明也

よよのノあハのノ山ヤマ栲ク多タかカりリすスはハ秋
此奇 朗詠集紀齊名云 山路日暮暮滿滿耳耳者者

推推詞詞牧牧笛笛之之聲聲洞洞戸戸鳥鳥歸歸遮遮眼眼者者竹竹煙煙松

霧霧之之色色 此文乃心とあり奇心分明也

薪薪のノ心ココロのノあハのノ山ヤマ栲ク多タかカりリすスはハ秋

百ハチ草草花花乃乃のノあハのノ山ヤマ栲ク多タかカりリすスはハ秋

百草花乃のあハの山栲多かりすは秋

菊の花はたむけし事 諸花はほろろとわたり
梅と花の鬼といひ菊と花の事いふやうに
る未だ花と心也

雲の上ま菊なりしにかひりつるは郡とくわいし長家

此等には云 風土記 甲斐国 鶴郡 有菊花山流水

洗菊 飲其水 人壽如鶴 云々

早しきものまじりて菊の白くさるるは心から花 崇徳院

菊花は早よまじりてゆふ又 蕙よ菊花より名あり

しつり早よまじりて花 雑物とくさるるは心から

此等やゆふはかきりてはす菊の白くさるるは心から

此等 重陽 暮の事也 風土記云 九月九日 折芙蓉房

以挿頭言辟除惡氣而禦初寒 又魏文帝與鐘

繇書曰 歲往月來 忽復九月九日 日月並應 陽數故曰

重陽 又重陽祝菊事 事文類聚曰 汝南桓景隨

費長房 游學累年 長房謂景 九月九日 汝家當有災

厄 急宜去 令家各作絳囊 盛茱萸 以繫臂 辟月登高

飲菊酒 此禍可消 景如言 舉家登山 夕還家 見鷄

狗 牛羊下 時暴死 長房因之 曰代乏矣 今世人每至

九日 登山飲菊酒 婦人帶茱萸囊 此等始ナルハシ

禁中ノ事 昔天子南殿 本御節會 行親王 達部探韻

給文作 文堂居 論 又群臣 菊酒と云 中張ノ左右

兼 夢乃囊と云 け 中 菊と置と云 江 次第

四十
此里之先せぬあそびみるる川せに今應に兼れりあり 定家
此并後鳥羽院水之然れ他國とすありまも也 芥此心ハ
穆王并童意量とすの王并神松と稱し 罪よりて
とろろの山申すてこれし時穆王不便よありて
法花後普門乃偈とすこしててましく此偈と毎朝唱
よ雖食物不飢と意量山よ入てまらんては
忍れ兼れあよ書付とてりまらるる其意は薬水と
成る元名死れああり意量則仙とあり彭祖とて
七百年の存よむとりて 朗詠集紀納言菊詩云
谷水洗花汲下流而得上壽者并餘家地脉和味食
日精駐羊顔者五百箇歳 之の心ふゆ也

はかりえて其とてそあつて箱とのひけり兼れよの果定家
此并宣陽宮也此裏各賦詩詠言也物之文章と
宮中の御書と各其期ともり撰たるまことり其心
よしてここといけりてりてりてり

秋山

此并 古文後集 漢父辞曰屋原曰舉世皆濁我獨
清衆人皆醉我獨醒是以見放云此心詞とて
松のこころよとてりてりてり

檀

四十一
かたはれまのひまゆりまつるあはれよす袖とつゆ念行
也の果 四十一

ろひのこまゆ、日本記云神功皇后五年葛城襲津
 彦と云入大將軍とて新羅に討つ同六十二年は
 同人新羅と撃つとき其人らとよく射つるより
 共人らとよく射つるゆえに共人らとよく射つる
 こひのこまゆのこまゆのこまゆのこまゆのこまゆ
 とも共人らとよく射つるゆえに共人らとよく射つる
 樹らひのこまゆのこまゆのこまゆのこまゆのこまゆ
 とも共人らとよく射つるゆえに共人らとよく射つる
 此のこまゆのこまゆのこまゆのこまゆのこまゆ
 とも共人らとよく射つるゆえに共人らとよく射つる
 乃此古今のこまゆのこまゆのこまゆのこまゆのこまゆ
 桐

百也相の樹はこまゆのこまゆのこまゆのこまゆのこまゆ
 此奇ハ鳳凰と云る也 瑞應圖曰鳳凰者仁鳥也雄
 曰鳳雌曰凰 卷阿曰鳳凰之性非梧桐不接非竹
 實不食 云々 六帖云不啄生虫不履生草不群居不
 侶行不經羅隊 網明治乱見存亡云々 不代の時
 丁ハ出ぬ鳥也 云々 此心 云々 云々 云々
 人ハ云々 云々 此相のこまゆのこまゆのこまゆのこまゆのこまゆ
 此奇判者定家云々 雨滴梧桐山館秋と云景氣海
 いせの海やあはれこまゆのこまゆのこまゆのこまゆのこまゆ
 古今集 仁鳥長奇なり 勅と云りてよめる 仁鳥ハ
 秋なり 仁鳥ハ長奇なり 勅と云りてよめる 仁鳥ハ長奇なり

聖

舟を〜〜〜〜〜

味酒の〜〜〜〜〜

長屋王

味酒の〜〜〜〜〜

日本記云 崇神天皇八年八月十二月 仰天皇天田根子

以太神崇此日神酒天皇捧奉於是天皇御歌曰

〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜

此等と謗する時〜〜〜〜〜 神代卷

素戔鳴尊諸葉との〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜

此等文集題仙遊寺 林間暖酒燒紅葉石題詩
拂緑苔 此詩其心と〜〜〜

暮秋

獨〜〜〜〜〜

此等朗詠落葉賦云 三秋而宮漏正長空階雨

滴萬里而鄉園河在落葉寔深 此心と〜

〜〜〜〜〜

白粉其弱〜〜〜

此二首の朗詠集九月盡 文峯按續白駒景詞海

儀舟紅葉聲〜〜〜

此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也

此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也

此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也

此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也

此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也

此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也

落葉

飛鳥の毛よめらるれば秋の心なり信明

此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也

此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也

此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也

此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也

此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也

此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也
此詩心詞とてしる也

又一部

神皇正統記
朗詠集云 十月江南天氣好可憐冬景似春花

朗詠集云 十月江南天氣好可憐冬景似春花

心と用ひるてよも色詩乃江南と揚子江の南と
こころと此の南吳下より暖むるをなれはと氣まき
こころとさうこれと此等十月乃此方より
時ありてさきなるはひりてさきよさうと此方より
きりて詩と國答せる奇あり

冬雜

あしと此の南にさき此方よりさき始り此千里
此等脇書と新愁多待夜長来とあり

千鳥

素鶉^{カガ}原^{ハラ}に此方より万葉とあり清河原とあり

すれらとさきと此方より此方よりさきとさきとさきと
八音をさきと花詞とさきとさきとさきと五音相通也と
乃心と鳥とさきとさきとさきとさきとさきとさきと
さきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきと
大和名一也

霜

此等ハ朗詠煩詩十八公榮霜後露一千年ノ
色雪中深松乃詩也吾の心ハ此方よりと此方より
ハ霜乃と白髪とありて霜と此方よりと此方より
ほも松とありて此方よりと此方よりと此方よりと

冬月

あつ雲もさびを村の元なれ月のリとまきくみれ西住

此奇 野展名月詩云 秋水漲来船去速夜雲

收盡月行遲 此詞とよあつた

久夜

久いさあねこ園うさすれい夜あつたれ花

あねいこ我事也東都乃詞也

すれ也

會

四九

こいれいさすれ夜まらさくともれ名も

班會也さすれ海さすれと云はり又一説

あつさすれ會光り乃奇乃心はさすれ也

五

あついさすれ會さすれさすれ夜まらさくともれ名も

さすれあつさすれさすれさすれ會と云はり

さすれさすれさすれさすれさすれさすれ

さすれさすれさすれさすれさすれさすれ

五

さすれさすれさすれさすれさすれさすれ

さすれさすれさすれさすれさすれさすれ

さすれさすれさすれさすれさすれさすれ

さすれさすれさすれさすれさすれさすれ

さすれさすれさすれさすれさすれさすれ

さすれさすれさすれさすれさすれさすれ

輟時録云

孟蜀王一錦被其潤猶今之三幅帛而一梭織成被頭
 作二穴若雲版樣蓋以叩于項下如盤鎖狀兩側餘
 錦則擁覆于肩此之謂死為衾也揚元誠大史言
 兒時聞尊人樞密公云嘗於宋宦庫見之
 傳云云其心可相見也指其心云云
 宋書云大夫韓馮娶妻而美康王奪之馮怒王依之
 論為城旦妻密遣馮書綴其辭曰其兩淫々河伏水
 深日出當心既而王得其書以示左右左右莫解其意
 獲賀對曰其兩淫々言愁且思河太水深不得往來
 也日出當心有死志也俄而馮乃自殺其妻乃隱
 腐其衣王與之登其臺妻遂因投其臺下左右攬之

衣不中手而死遺書於帶曰望利其生妾利其死願以
 屍骨賜馮合葬王怒不聽使人埋之塚相望也王曰
 爾夫婦相愛不已若能使塚合吾不阻也宿昔之間
 使有大梓木生於二塚之端旬日大盈抱屈體以相斲
 根交於下枝錯於上又有死鳥鸞雌雄各一恒栖樹
 上晨夜不交一類悲鳴音聲感人宋人哀之遂号
 其木曰相思樹相思之名起於是也今睢陽有韓馮
 城其歌謠至今存焉云云 此心と云々
 漢臥東野也末と云々一東許の射と云々也清榮と書榮
 云々川と云々其心と云々集と云々也

霽

五言
之...
法華經五百弟子品云譬如有久至親之家醉酒而歸是時
親友宦事當行以無價寶珠繫其衣裡與之而去其人
醉卧都不覺知起已遊行到於他國為衣食故勤勞求
索甚甚艱難若少有所得便以為足於後親友會遇
見之作如是言拙哉丈夫為衣食乃至如是我昔欲
令汝得安樂五欲自恣於某年月日以無價寶珠
繫汝衣裡云云 此心とあるらん

詩林拾葉集卷第五

雪

山陰やまを...
此...
皎然因詠招隱詩忽憶戴逵此時在剡溪便乘小舟
詣之既造門而返或問之對曰乘興而來興盡而返何必
見戴安道耶云云 此心とあるらん

二
口...
周保章氏以五雲之物辨吉凶水旱豐稔之祲象鄭
司農注二分二至觀雲氣青為蟲白為喪赤為兵

口...
周保章氏以五雲之物辨吉凶水旱豐稔之祲象鄭
司農注二分二至觀雲氣青為蟲白為喪赤為兵

荒黒為氷黄為豊 黄のうらやと豊と千しあれ
と云ふは豊年乃と云ふはいしむれと年と云ふは
と云ふは此の黄のうらやと云ふは豊と云ふは豊
年と云ふは豊年と云ふは

山人乃老のね 終つこれ人言と云ふは志實れ候 天象
此の心昔天智天皇 東津宮におくや 所伽藍即
建立其心ありあり一人此のありて 奉れ其夢
の奏していそぐ 成妻乃言と云ふは心 靈姫あり
か 一と云ふは人となりと云ふは 勅使と云ふは
と云ふは 光のやと云ふは 光と云ふは 柱此 壽現と云ふは
けり云ふは 帝則 隱事ありと云ふは 仙人ありて 奏して 曰

我昔此湖水と歴覽せし 五色に波湖と云ふは 其聲と
と云ふは 五邊羅密と唱へりかの 此と云ふは 心ありて
未信して是と云ふは 教百歳と云ふは 留と云ふは 古仙靈姫
依藏地作 名實長等と云ふは 忽と云ふは かくれ 景ぬ
ゆ 彼前 靈場と云ふは かくれ 則崇福寺と云ふは
と云ふは 今 園城寺是也 此心と云ふは 天象

此の心 天不言而自四時行 心ありて かくれ 景ぬ
と云ふは かくれ 景ぬ かくれ 景ぬ かくれ 景ぬ
と云ふは かくれ 景ぬ かくれ 景ぬ かくれ 景ぬ

此まじりてわらへんまじりてむらじりて
心なす

鷹將

豊明節會ハ霜月中乃辰日也号大嘗會其奉礼指
と神言は供もり君もささりてはしりて供もり也
江次第十卷云時剋天皇渡御南殿内侍二人持金
釵命婦女藏へ各四人 緞結裳泥繪 相從藏人頭候
御袴 靴 櫛 不藏人持式并御靴等扈從御厨子所候
明義門内下各御箸鳴 臣下應之供百魚御酒 各四度

次給同酒 臣下 各一度 杯名 給之 云々 此將ハ節會乃供御
乃の申也 日けりてハ 蘿花 乃の事也 曲聖明又ハ
神言はかくも也 交野行也

大嘗會乃舞姫前後御後乃事也 五節乃舞姫
としハ是也 上乃ハ 辛儀 新波乃とせし
也 此ハ洛中 賀乃川乃とて 予乃事とら 當其
流乃也 所後乃とら 乃ハ 豊明乃とて 又
也 此れ乃とら 乃也

此奇 法華經序品曰見菩薩頭目身寐欣樂

施與未佛智惠上。四教集解云釋迦菩薩本作國王。名曰尸毘得歸命救護。陀羅尼視諸眾生猶如一子。時天帝釋知命將終求佛問疑徧求不得。時天巧師毘首羯磨謂天帝曰。有大菩薩滿足六度。不及成佛。天帝乃云須往試之。天帝化為鷹鳥。毘首變作鴿。鷹鳥逐鴿至王之掖下。鷹語王言還我鴿。王曰。我非汝前而受此鴿。我先發願度諸眾生。豈還汝耶。鷹言我豈不是一切眾生而奪我食耶。王曰。汝何食乎。鷹言我食血肉。王即思惟我此身者恒受老死。不久腐爛。我當持刀割肉與之。鷹又謂曰。須逐道理。令輕重等勿見欺也。王即稱鴿。鴿身轉重。王肉漸

輕。王乃於是以手攀稱盡。對於鴿。于時諸天歎云。菩薩為此小鴿如是救之。當斯時也。天地大動。海水揚波。枯木生華。天雨香水。鷹語鴿云。真是菩薩。都無憂惱之心。於是身肉平復如故。云。此鴿云。人云。殺云。也。

此奇ハ日本記十卷仁德天皇四年三月秋九月子庚朔依綱屯倉阿弭古捕異鳥獻於天皇曰。臣每張網捕鳥。味曾得是鳥之類。故奇而獻之。天皇召酒君示鳥。曰。是何鳥矣。酒君對言。此鳥類多在百濟。得馴而能從。又亦捷飛之。掠諸鳥。

百濟俗号此鳥曰俱知是今時鷹也乃授酒君人令養良馴
未幾時得馴酒君則以韋絡著其足以小鈴著
其尾居腕上献于天皇是日幸百舌鳥野而遊
獵時雌雉多起乃放鷹令捕忽獲數千雉
是月甫定鷹耳部故時以号其養鷹之
處曰鷹鳥其邑也 又天皇幸河内国石津
原以定陵地是日有鹿忽從野中走來仆死時
アヤシミテ其疵ヲ求ルニ即百舌鳥耳中ヨリ出テ飛去
耳中ヲ見レハ咋割故ニ其所ヲ号テ百舌鳥野ト云リ
天皇葬百舌野百舌鳥野陵ト云 河内国也

豊明

七
豊明の事云々日新記云々
豊明乃事前鷹狩乃云々
日本記云云云天皇吉野乃宮云々
一付向此考云々云々
舞其舞云々云々
天平十五年五月云々
日新記云々云々
今云々云々云々
云々云々云々云々
賀正條時系

ハ
この神ハ
此儀時祭乃
有る事此
駿河舞乃
神樂

神樂

九
延喜式云園
用春日祭後
坐畧先供南
左右衛士山
神祇官哥遊
御巫舞先於
南殿幔中舞
次出

舞次神部
口傳云件神
遷他所神託
座宮内省式
云園神一坐
韓神二坐云
奇心也

十
此奇神部
いさハ舞也
くみそ
と
和井也納涼乃
也此奇也

中の夜六初夜中夜後夜七分中夜也
か一分江次弟曰今夜差栢梨左近衛府栢梨庄名也以彼地栢梨所造之其糟也酒此事也栢梨酒也所造酒也
とれははは次弟曰出居勸酒者於王郷是勸右中夜よ此酒と衆僧よしむくことしむくこと
十五
あま〜い竹の灯〜ワ〜三世佛の〜
挑燭事 江次弟云 藏人二人上臈持暗燭下臈持
油瓶先挑廂南第一間橙樓次御帳巽角次始
南壁下東第一至御帳乾角更還挑竹燈臺
第五間燈東挑竹燈臺下畧
又西宮日記曰竹燈臺三基金銅云々此亦此心〜

歲暮

六
九章其やろよりやらぬ其れ〜
是ハ除夜其儺鬼と〜也 山海經曰昔顓頊氏有
三子一而為疫鬼一居江中為瘴鬼一居山谷為羆鬼
羆鬼一居宮室區隅中善驚小兒於是歲十二
月命祀官時儺以索室中而驅疫鬼謂東海度
索山有神荼鬱壘之神以禦凶鬼為民除害因
制驅儺之神云々又儺名式法漢禮儀志曰季冬
先臈百儺謂之驅疫選侘子百二十人皆赤幘皂
制表執大北報命方相氏黃金四目蒙熊皮玄衣
朱裳執戈持戟率百隸及童子時逐惡鬼於

禁中云々又本朝之式法 江次弟曰陰陽寮以靴
枝弓葦矢進上鄉以下下畧方相先作儼聲以戈
叩楯三ヶ度群臣相羨和呼追之方相經明義仙
花門出北廊上鄉以下隨方相後度御前出
自龍口戶殿上人於長橋內射方相主上於南殿
密賢見還御之時扈從人已最前行逢方相振
鼓儼木儼法師等種々事アリ

日本始行禁中文武天皇慶雲三年十二月己卯
有勅令天下脫輕裳一著白袴是年天下諸
國疫疾百姓多死始作土牛大儼
後朱雀寬德元年十二月廿日上鄉權中納言資平

卿已下參入以左少弁資平奏云刻限漸到早申
行如何仰云天下之動靜唯依追儼遲速而迫
年不得刻限急行退出故灾孽子頻發人民不安
於今者慥守刻限可申行者上鄉資平以下深所
畏申也

金谷園詞云陰氣將始來陰陽相激化為疾癘
之鬼為人家作病 使防相氏黃金四目身著朱
衣手把捍楯作儼聲以驅疫鬼昔高辛氏
子十二月晦夜死其靈成鬼致疾病云々
王建宮詞云 金吾除夜進儼名画袴朱衣四隊
行院々燒燈如白日沈香火裡坐吹笙

論語曰鄉人為籩朝服立阼階孔安國註云籩驅逐疫鬼云
又節分撒豆事 事物紀原曰撒豆穀漢世
京房之女適翼奉子奉擇日迎之房以其
日不吉以三煞在門故也三煞者謂青草烏雞
青牛之神也凡是在門新人不得入犯之損
尊長及無子奉以謂不熟婦將至門但以穀
豆與草攘之則三煞自避新人可入也自此以來
凡嫁娶者皆置草於門閭內下車則撒穀豆
既至戚足草於側而入今以為故事也
又寶舟事 原於韓退之送窮之文作舢舨
此亦乃俗也

正月節會其夜の事なり

天象

久しれり三光ハ日月辰ノ三也 齊乃心後宋極

君代ハ七ノ星春秋運 斗樞北斗七星 第一天樞 第二璇

五衡 第六開陽 第七搖光 第一至 四合 為斗居

陰布陽故稱北

書經曰舜在璿璣玉衡以齊月七政

說文曰萬物精上為列星 春秋說題辭曰陽精

為日分星故其字日生為星
了了如如北斗守星不移位
君代りかかぬゆり
耳あゝ河内縣星也
耳あゝ河内縣八瀬川也古賢高尚不爭名行止由來
勤香冥今日浪為千里客看花慙上德白生亭
後漢陳寔字仲弓潁川許人除太丘長在鄉回平
心接物有爭訟皆求正直退無怨言至乃歎曰寧
為刑罰所加不為陳寔所知荀叔字季和潁川
黠陰人為朗陵侯忠事明理稱為神君項之異官
困居養志又大丘陳仲弓與諸子姪造亭子和父子

十九 討論于時德星聚太史奏曰五百里內有賢人聚
夕つしかよふと路に月を仰ぐ月人か
夕つハ早の名也 順和名一卷云無名苑云太白
星一名長庚暮見於西方為長庚此同
月人男八月ノ異名也 桂男佐々良惠男之類也
奇乃心志乃心
夕つ

十九 此本あれは早し
上夕ハ張騫古事也 妻七夕也
下夕ハ心ハ
あひ

言のまこと...
 八嶋...
 夫亦謂書云此奇ハ...
 九年太子...
 八嶋...
 光と...

太子天子...
 五行象...
 主南火也...
 作...
 此奇...
 太子傳云...
 八嶋...
 絶世夜...

あつたつたて 矢一筋ひらひらりてあつてありて異
人其事と共矢とてしりしとてせしめり異人た
収ひてくぬ思事やめりかけつんとてり弘うい
お新とてらるぬ不定なる事なり思ひぬ
事よ伝ふしひされと異人なりお山神也任汝
預朝ふ南乃凡もせり少く送り暮るふ凡次
せり南よ送りんとてり是よりぬ女此也言
しりしとて大尉の事せしめり此とて 朝鑑集
菅三岳詩云 且南暮北鄭太尉之溪風 被入知
此故事とてより奇なり
八三やとてる凡もせり北邊より北邊より公朝

神代卷曰伊特諾導曰我所生之國唯有朝霧
而薰滿之哉乃吹撥之氣化為神号曰級長
戸邊命亦曰級長津彦命是風神也
是乃此凡も件乃神れ名なりおこれり此凡も
より思ひぬ公言なりとてつんころり
る凡もせりうせりくしりし也

是乃此凡も件乃神れ名なりおこれり此凡も
より思ひぬ公言なりとてつんころり
る凡もせりうせりくしりし也
この事とて凡も名也 催馬柴逢坂乃奇なり
あつたつたての事なりいひし事なり
わん事の事なりいひし事なり 梁塵秘訣に
その事なりいひし事なり 野分なり此類也

や此事也... 海... 心... 不相... 也

廿五

此奇... 千五百... 奇也... 列者... 曰右奇... 樂

府... 何... 又... 事... とい... 取... され

了... 後... 奇... 心... け... 事... 人... 孫... の... こと

西京雜記云瑞雲曰慶雲... 五色

韓退之賀慶雲表云五彩五色光華不可備

觀云魏書云文帝生有雲氣青色如蓋

狀其上望者以為貴人之證云云

云云

云云... 奇... 心... 諸人... 此... 奇... 心... 云云

廿六

此奇... 古... 今... 此... 奇... 心... 云云

云云... 奇... 心... 云云

云云... 奇... 心... 云云

云云... 奇... 心... 云云

云云... 奇... 心... 云云

云云... 奇... 心... 云云

云云... 奇... 心... 云云

云云... 奇... 心... 云云

云云... 奇... 心... 云云

絶せざる也 和奇浦紀別也

兩

此奇 冲集之建曆元年七月 倍水漫天 壬辰
歎 せん事と思て一人奉向本尊 敬致初念
是と云ふは 誠勤天地 感鬼神之道 不徒言西行
家集より 高野より 粉川より 入る 齋て 吹らん
て まりける道より 大西大凡 吹て 無るく ありき
経國法師の 言代ふる せられたる 事と云ふ こと
とん なるゆゑ こと 社より けり けり あり
五つ なる名と 思ふ こと 社より けり けり あり

言代とせられたる こと 社より けり けり あり
かゝる なる こと 社より けり けり あり
八大龍王 一難陀龍王 此云 歡喜
三婆伽羅龍王 此云 海 四和修吉龍王 此云 多頭 五徳叉迦
龍王 此云 視毒 六阿那婆達多龍王 此云 無熱 七摩那
斯龍王 此云 大身 八優鉢羅龍王 此云 蓮花池
あとの こと 社より けり けり あり

此等 一花 經文の 心也 思家 火宅也 三界 猶火宅
一味雨 粟草 吟品云 佛平等 説如一味雨
隨衆生 性所受 不同 如彼 草木 所稟 各異
此心 同卷云 一雨 所潤 而諸 木各 有差別 註曰

陰之氣也 月令曰季春之月虹始見孟夏之月虹
藏不見云 蔡邕月令章句云虹依陰雲而晝見
日循無雲不見太陰亦不見率以日西見東
火

此奇朝書云文永元年每日一首中七月十四日夜あり

孟蘭盆乃心とありなり 孟蘭盆經委

釋氏要覽下云 孟蘭盆此釋氏申孝報恩救苦
之要以目連救母為始也梵語孟蘭盆此云救倒懸

盆則此方器也義淨云孟蘭西域之語此云救倒
懸也即飢虛危苦謂之倒懸也盆則東夏之

音此則救苦之器所以仰大衆之恩光救倒懸之
窘急此從義以制名也

本唐始修行孟蘭盆事佛祖通載十四日唐代宗
大曆元年道義禪師建金剛寺勅十節使助之
以二統七月始作孟蘭盆會于禁中設高祖太
宗已下七聖位備臺舉建巨幡各以帝号標
其上自太廟迎入内道場銳吹鼓舞雜幢燭
矢是日之仗百僚於光順門迎拜導從自是
歲以為常云

日本始修行孟蘭盆事 續日本記十一卷云人王
四十五代聖武天皇天平五年秋七月始令大膳

備孟蘭盆供養。孟蘭盆會作法禁中行
給者。江次第八月七月十四日當也。行事藏人兼日
成內藏寮。請奏。奏下成迴文。催雜色以下。當日
早旦主殿寮。供御湯。次以內藏寮持參件御盆
等於殿上。口方。次藏人取彼寮。送文。奏。同之。畧
次下。廂御。簾。次以大床。子上。圓座。鋪。第三。間。簾
中。次。掃部寮。鋪。廣。延於清涼殿。孫。廂。畧。次。主。上
著御畧。次殿上侍臣以下。取御盆物。居之於長橫。
上。小書云於小板敷取之。入自殿上。東。戶。居之。入自長橫。
中。北。行。次。才。居之。以紙。裹。盆。置。西。以蓮葉。裹。盆。
置。東。先。白。一。具。
次。青。其。後。皆。如此。
次。御。拜。三。度。鞞。次。侍。臣。等。撤。之。如。初。次。藏。人。仰。出。納。

念成送文。送於先皇御願當寺。
圓宗寺法成寺。阿弥陀
堂是兼保創也。可隨時
若當御物忌者。夜前可籠之。
請奏。

請白米伍斛。
石米十四日御盆供料。以諸國所進年料。內依例
所請如件。

年月日。
正六位上
正六位下
童帝時。無御拜。未令着御國忌。並會給之。故也。
但童帝例。寬治元。天仁元。天承元。
又。次。明天皇。御宇。於飛鳥寺。作。須彌山圖。令設
孟蘭盆。諸寺。行。支。ト云。

燈ト入ル身ニ坐シ此ノ身ハ何レ也ト問フ曰ク此ノ身ハ何レ也ト答ク此ノ身ハ燈ト也ト曰ク燈ハ何レ也ト答ク燈ハ火ト也ト曰ク火ハ何レ也ト答ク火ハ光ト也ト曰ク光ハ何レ也ト答ク光ハ照ス也ト曰ク照ス何レ也ト答ク照スハ

此ノ身ハ燈ト也ト陳去非詩云陽光不照臨

積陰生此類非無惜死心素有賊明意粉穿紅

焰焦翅撲蘭膏沸為泣傷嗔自弃冰天弃

又古句短教低掛易投身也蟻と云出く凡

と云明のいしらよとて燈と云出く凡

と云死と患と云つつ身と云もと云つつ又堂と夏也

此ノ身ハ燈ト也ト石ノ火ハ此ノ身ト也ト世ハ此ノ身ト也ト火ハ此ノ身ト也ト光ハ此ノ身ト也ト照スハ

此ノ身ハ燈ト也ト白氏文集二十六云蝸牛角上爭何事也

石火光中寂此身也電光石火と云女其回又

と云世れつるもと云つつ石れ火と云女其回又

此ノ身ハ燈ト也ト石ノ火ハ此ノ身ト也ト世ハ此ノ身ト也ト火ハ此ノ身ト也ト光ハ此ノ身ト也ト照スハ

此ノ身ハ燈ト也ト石ノ火ハ此ノ身ト也ト世ハ此ノ身ト也ト火ハ此ノ身ト也ト光ハ此ノ身ト也ト照スハ

此ノ身ハ燈ト也ト石ノ火ハ此ノ身ト也ト世ハ此ノ身ト也ト火ハ此ノ身ト也ト光ハ此ノ身ト也ト照スハ

此ノ身ハ燈ト也ト石ノ火ハ此ノ身ト也ト世ハ此ノ身ト也ト火ハ此ノ身ト也ト光ハ此ノ身ト也ト照スハ

此ノ身ハ燈ト也ト石ノ火ハ此ノ身ト也ト世ハ此ノ身ト也ト火ハ此ノ身ト也ト光ハ此ノ身ト也ト照スハ

此ノ身ハ燈ト也ト石ノ火ハ此ノ身ト也ト世ハ此ノ身ト也ト火ハ此ノ身ト也ト光ハ此ノ身ト也ト照スハ

此ノ身ハ燈ト也ト石ノ火ハ此ノ身ト也ト世ハ此ノ身ト也ト火ハ此ノ身ト也ト光ハ此ノ身ト也ト照スハ

世四 煙

ひさしく香煙の煙はあつりひつたはあつり花あり光後
ひさしく香煙の煙はあつりひつたはあつり花あり光後
世平の行水はあつりひつたはあつり花あり光後
時つり光れせまらふある事 羊比 舞はあつりひつたは
死の道くやう事ととも色 羊の歩と唐とてん
宗廟とまらふよしとみ我供滞しと羊と傳あつり
其坦の羊とつれ行てつりひつたはあつり花あり光後
して行よ一歩の死の道くやう事ととも色 羊の歩と唐とてん
世常速くあつりひつたはあつり花あり光後
事文類聚續集十二卷之 洪舟切香譜云近世尚

奇者鐵木以為之範香塵為篆文準十二辰分百刻
凡燃畫一夜或熱於飲席或佛像前 塵

元世のさうしてとらふ後世はあつりひつたはあつり花あり光後
此奇の心若き時つたはあつりひつたはあつり花あり光後
つりひつたはあつりひつたはあつりひつたはあつり花あり光後
とらふの心若き時つたはあつりひつたはあつり花あり光後
一 塵は清淨なる物とけりつたはあつりひつたはあつり花あり光後
つたはあつりひつたはあつりひつたはあつり花あり光後
つたはあつりひつたはあつりひつたはあつり花あり光後
つたはあつりひつたはあつりひつたはあつり花あり光後
つたはあつりひつたはあつりひつたはあつり花あり光後
つたはあつりひつたはあつりひつたはあつり花あり光後

此亦摩訶止觀一卷宝性論云有神通人見佛法滅
以太千經卷藏一塵中後有久破塵出卷華嚴
如來性品云佛子譬如有經卷如大千界所有一切
無不記錄二千小千須弥山王乃至色欲天堂等大皆
記其事文廣時有人出與於世具足天眼見此經
卷在一塵内作是念云何經卷在一塵内而不覺
益一切衆生我勤方便破塵出卷彼人即以方便如
出卷佛子如來智惠具足在於衆生身中為惑所
覆不見不知如來天眼觀已言善哉云何如來
在於身中而不覺知我當教彼覺悟聖道入離
顛倒見如來性即時人云彼修八聖道見如來性一地

多種一丸多氣並喻於有此文乃心之妙用也
此等是とんくよも名代はさかすまりていりるかん之類

此等ハ 常是とよりくくかん一巻ハふされくも
なれん世乃とれりていりていりていりていりていり
いりていりていりていりていりていりていりていり
早ららつとよりていりていりていりていりていりていり

順和名兼名花云慧星其形如帚筆

此の形は花の如くはたして星の如くはたして筆の如くはたして
此の形は花の如くはたして星の如くはたして筆の如くはたして
此の形は花の如くはたして星の如くはたして筆の如くはたして
此の形は花の如くはたして星の如くはたして筆の如くはたして
此の形は花の如くはたして星の如くはたして筆の如くはたして
此の形は花の如くはたして星の如くはたして筆の如くはたして
此の形は花の如くはたして星の如くはたして筆の如くはたして
此の形は花の如くはたして星の如くはたして筆の如くはたして
此の形は花の如くはたして星の如くはたして筆の如くはたして
此の形は花の如くはたして星の如くはたして筆の如くはたして

此の形は花の如くはたして星の如くはたして筆の如くはたして

刻數不同蓋日未出前一刻半而天已明即屬晝
日已入後一刻半而天未暝亦屬晝故晝刻常
多於日出入之時也
一云之時此れと考へ也くわハさす也なれど
一云之時のいひけるは世の時にあはれ共さけり
くの時よりの定喜か日迎衛式凡行夜者内裡官
人一人迎衛一入左迎衛起一刻迄子四刻右迎
衛起一刻迄寅四刻迄又砂之けり始ハ
博物志云五輪沙漏北方水善氷牽漏不下新安
倉希希以沙代水人以為古未有也有五輪以機運
之四輪皆側旋中輪平旋

日本とく漏と内裡と云るに
日本記曰天智天皇十年夏四月置漏刻於新
基始打候時動鐘鼓始用漏刻此漏尅者
天皇為皇太子時始親所製衣造也
此漏も色々其名あり或ハ蓮花乃くちと作り
又ハのこれと云るもあり也園積居
法詩學十五卷より

彼岸

此の事可彼岸年中日と云る也
昔時正為日相觀
得成佛道と云り余れ時八日此巡の偏あり彼岸ハ

四時乃中より日れ東より出て西へ入る也され
人れ心して一して日と隨て西方と念とて云ん
多々一と西方と佛土と云はれ極りある
事四方此中より西されも不動無疑と云ふ也
夜のれれとて極り極り極り今とて四六回
此等ハ極り極り極り余の時ハ晝夜ハ不同あり彼
者ハ晝五時刻 夜五時刻也云々云々云々
こと時正と云也云々云々云々

彼岸 經云晝夜齊等比兩岸左右均等
一季と四季と分てても 經ハ有二季夏ハ春の餘
もハ秋の餘ハ夏日也云々云々云々

ワハ日短くれ云々云々云々 左傳
二季乃同ハ彼岸ハ二時也

善導和尚定善義云 此觀經釋曰不取夏冬
兩時唯取春秋二際其日正東出直西没弥陀
佛國當日没處直西超過十萬億那由是也

出西の邊より云々云々云々 異說云此彼岸ハ冥衆ト

諸天中陽院集衆生善惡評定云々同彼岸經云
諸天此日交合ニテ淨願梨鏡ニテアハル所ハ善惡ヲ評

定レルヨリ此日善行ヲ成ト云々 私云此兩說為偽

説由故人之平説也。これハ此善惡評定ノ日ヨリ
より善行と云ハ諸天ノ評定ノありしんともや
もろくも諸天と云ハ何れもすなり。此等ノ善行
ハ孔子立所ニとるは佛も善惡有常ニ信説し
諸天と云ハ何れもすなり。此等ノ善行ハ
人心ノ向ふ所也。此等もすなり。時心と云ハ
日想觀と云ハ心と云ハ何れもすなり。
元亨釋書云三井寺釈千觀園城寺有從年西峯寺日
觀行ノ物と云ハ求遠勝地趣棋局至有下山掛
金色雲是則靈地也と云ハ居住と云ハ

きて彼岸と云ハ名目ハ凡夫ハ火宅と難言さるる底て
此岸と云ハ善六穢と難言死乃海と難言しり
彼岸と云ハ時季正と云ハ心よりなり。彼岸
と云ハ佛と云ハ心と云ハ魔ハ邪と云ハ心と云ハ
或説曰曆と規範と云ハ用事彼岸七日と云ハ大
しね二月八月乃中より後と云ハ不害之春秋中
分日と中日と定事如何答云昔此曆ハ二月中
八月中有彼岸中日定事明白也其證如安
氏陰陽輯集集中二事ハ彼岸ハ二月八月中前三
日目は是なり。其ハ四日前と云ハ
三事ハ其ハ曆家者流中、後と云ハ子細也

世あらはしとありしは是乃不其時と世あらはし
 中もこれ等なりとのありしと謂源氏なりし
 いけりといふなりと云ふなりとありしとありし
 といふなりとありしと云ふなりとありしとありし
 此等なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 皇置山ハ天武天皇弟三皇子大津皇子本願建之
 左大舟貞憲男釋貞慶用基也其後宇多天皇再
 與皇置窟ハ木津後より三里半許東賀茂里ニ
 里川岸と行道あり皇置山ハ川南里川北南西方アリ
 玉葉集詞書ニ解脫上人笠置窟ニ般若臺名付
 閑居乃地と云ふて春日明神と請一奉修せん

童子此と云ふて明神上人ノ頭ノのりてりしと云ふ
 たりと云ふて明神浄寺
 秋ゆゑ行て寺ニ般若臺秋遊此法のありしが
 法乃朝貝ハ孫勒乃事也委意氏乃奇此あり
 三
 此等なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 此等なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

太子傳云人王世二代推古天皇二十一年冬十二月朔日
 太子命駕巡省山西科長山本墓處還向之時即
 日申時枉道入於片岡山邊道人家即有飢人卧
 道頭去三丈許驪駒届此不進太子加鞭遂巡
 猶駐太子自言哀哀即下馬舍人調使磨走

進献秋大子步^フ近^ニ飢人之上^ニ臨^リ詰^テ之^ヲ可^ク怜^ク何^レ為^ル人^{ナリ}
耶^ヤ於^テ此^ニ而^{シテ}卧^リ即^チ脫^キ紫^ノ御^袍覆^ヒ飢^人身^ヲ賜^ヒ詠^{ハシ}曰^ク
支^ニ那^ト照^レ耶^ヤ片^ク岳^ノ山^ノ迹^ニ飯^ヲ迹^ニ飢^人而^{シテ}卧^リ其^ノ旅^人可^ク怜^ク
袒^ニ無^シ迹^ニ汝^ノ成^ル米^ヲ耶^ヤ刺^シ竹^ノ之^ヲ君^速無^シ母^ヲ飯^{ハシ}飢^人而^{シテ}卧^リ
其^ノ旅^人可^ク怜^ク飢^人起^リ首^ヲ進^メ吞^ヒ詠^{ハシ}曰^ク班^カ鳩^ノ之^ヲ富^シ小^ノ河^ノ
之^ヲ絶^ス者^{ナリ}社^ニ我^ノ王^ノ之^ヲ御^名者^{ナリ}志^メ目^ヲ飢^人之^ヲ形^ヲ面^ヲ長^ク頭^ヲ
大^ク兩^ノ耳^ヲ長^ク目^ヲ細^ク長^ク用^目内^ニ有^リ金^ノ色^ノ光^ヲ異^ニ於^テ時^ノ人^ノ復^ス
身^ヲ躰^ニ大^ク香^シ非^ズ人^ノ之^ヲ所^ニ嗅^ル太^子問^テ磨^曰彼^ノ人^ノ香^ハ名^モ磨^ト
對^曰大^ク香^シ太^子曰^ク汝^ノ磨^者命^ヲ可^ク延^シ長^ク飢^人與^テ太^子
子^ト相^シ語^ス數^テ十^ニ言^{ハシ}舍^人左^ニ右^ニ不^レ識^シ其^ノ意^ヲ還^テ宮^後
遣^シ使^ヲ視^シ之^ヲ使^復啓^曰飢^人既^ニ死^ス去^リ太^子大^ク悲^シ

使^テ厚^ク葬^シ埋^シ造^リ墓^ヲ高^ク大^ク于^テ時^ノ太^臣馬^子宿^禰七^太
夫^等皆^テ譏^リ曰^ク殿^下聖^德難^ク測^ル妙^ク跡^ヲ易^ク迷^ヒ而^{シテ}道^ヲ
頭^ヲ飢^人是^レ早^ク賤^ク者^{ナリ}何^レ以^テ下^ニ馬^ヲ與^テ彼^ノ相^シ語^シ復^テ賜^ヒ詠^{ハシ}
詠^{ハシ}及^テ其^ノ死^也無^シ狀^{ナリ}厚^ク葬^シ何^レ以^テ能^ク治^ス天^下太^夫以^テ下^之
臣^ヲ太^子聞^ク之^ヲ即^チ召^シ七^太夫^等譏^者命^ヲ曰^ク卿^等宜^ク往^テ片^ク
岳^ニ後^ニ葬^シ墓^ヲ看^ル之^ヲ七^太夫^等受^テ命^ヲ往^テ用^棺無^シ有^リ其^ノ
屍^棺内^ニ太^香所^ニ賜^ヒ欵^物彩^帛等^帖在^棺上^唯太^子
子^ノ所^ニ賜^ヒ紫^ノ袍^者無^シ七^太夫^等看^テ而^{シテ}大^ク奇^ク深^ク歎^シ聖^德
德^ノ不^レ可^ク思^{ハシ}議^ス還^テ向^テ報^命太^子曰^ク意^ニ慕^ヒ誦^{ハシ}其^ノ
詠^{ハシ}即^チ遣^シ舍^人取^テ所^ニ欵^{衣服}而^{シテ}御^之如^故云^{ハシ}
刺^シ竹^ノ君^速無^シ母^等ト^ハ三^乘五^乘指^南ト^{ナル}君^無故^{ナリ}

此去衆生耳露ノ法味ニ飢ト也
支那照ハ片岳山枕詞也哥心ハ支那照ハ唐土名也
照彼國給ト也片岳山ハ日本ハ粟散片國也飯飢
日本未夕佛法無故ニ飢法味也臥旅人ハ天竺ヨリ來
給トイトモ未無佛ナル故法味ニ飢ト心也刺竹君トハ
箭之事也空則ハ弓ニ依テ何方モ行其如少教訓スル
親モ無故ニ飢人ト成哀サト也遙ニ慈父釋尊ニ離
來給甲斐モ無無佛法ノ衆生難度可憐々々親無也
荅訶班鳩ハ太子宮所也富小河其地有川大和平
群郡有富小河絶サルホトハ太子ノ御名モ心ニシキト也
哥ノ表心ハ太子弘通ノ法水弥勤三會ノ曉迄モ絶

ニキト也又ハ其法水ノ流行ニ隨テ本師釈迦之御名
忘奉ラレトノ心也 造墓 片岳山麓放光寺
モ寅ニ町許去テ大墓是也
七太夫 殿上人七弁也左大弁右大弁左中弁右中弁
左少弁右少弁同ニ權官一人以任之仍是七弁ト云
孝經曰昔者天子有華臣七人矣是也七人トハ太師
太傅太保前疑後秉右弼左輔是等也
四
イハルコトノ心ニ極田山ニシヨリ其名カケリカケル
緑林輿地志云諸亡命聚緑林山中注云緑林
山荆別山名也云々 緑林白波トテ盗人乃事アリ
白波トテ所ノ名也唐土白波谷ト云不ノ賊カケル

五
盗人^五心^五横田^五心^五也
盗人^五心^五横田^五心^五也
盗人^五心^五横田^五心^五也
盗人^五心^五横田^五心^五也
盗人^五心^五横田^五心^五也
盗人^五心^五横田^五心^五也
盗人^五心^五横田^五心^五也
盗人^五心^五横田^五心^五也
盗人^五心^五横田^五心^五也
盗人^五心^五横田^五心^五也

六
此奇^六河内^六國^六教^六典^六寺^六也
此奇^六河内^六國^六教^六典^六寺^六也
此奇^六河内^六國^六教^六典^六寺^六也
此奇^六河内^六國^六教^六典^六寺^六也
此奇^六河内^六國^六教^六典^六寺^六也
此奇^六河内^六國^六教^六典^六寺^六也
此奇^六河内^六國^六教^六典^六寺^六也
此奇^六河内^六國^六教^六典^六寺^六也
此奇^六河内^六國^六教^六典^六寺^六也
此奇^六河内^六國^六教^六典^六寺^六也

七
此奇^七河内^七國^七教^七典^七寺^七也
此奇^七河内^七國^七教^七典^七寺^七也
此奇^七河内^七國^七教^七典^七寺^七也
此奇^七河内^七國^七教^七典^七寺^七也
此奇^七河内^七國^七教^七典^七寺^七也
此奇^七河内^七國^七教^七典^七寺^七也
此奇^七河内^七國^七教^七典^七寺^七也
此奇^七河内^七國^七教^七典^七寺^七也
此奇^七河内^七國^七教^七典^七寺^七也
此奇^七河内^七國^七教^七典^七寺^七也

史記卷之一五帝本記云虞舜者名曰重華父曰
瞽叟瞽叟父曰橋牛々々父曰句望々々父曰敬康
々々父曰窮蟬々々父曰帝顓頊々々父曰昌意以至
舜七世矣自從窮蟬以至帝舜皆微為庶人
舜父瞽叟盲而舜母死索隱曰皇甫謐云舜母名握登生舜於姚墟因姚氏也
瞽叟更娶妻而生象象傲瞽叟愛後妻子常欲
殺舜舜避逃及有小過則受罪煩事父及後母
與弟日以篤謹匪有懈舜冀州之人也舜耕歷
山漢留澤陶河濱作什器於壽丘就時於負夏
舜父瞽叟頑母嚚弟象傲皆欲殺舜舜煩
適不失子道兄弟孝慈欲殺不可得即求嘗

在側舜年二十以孝聞三十而帝堯問可用者中獄咸
薦虞舜曰可於是堯乃以二女妻舜以觀其內使九
男與處以觀其外舜居媯汭內行弥謹堯二女不
敢以貴驕事舜親戚甚有婦道堯九男皆益
篤舜耕歷山歷山人皆讓畔漢留澤雷澤上
人皆讓居陶河濱河濱畧皆不苦穡一年而所
居成聚二年成邑三年成都云々舜乃心此文化
中舜耕歷山歷山之人皆讓畔云々心云々
舜之後嗣此少乃有月周之のいなり此のいなり長明
此舜ハ教をいなりめなりこりハ火をいなり
其のいなり麻れなり射りま也照射書火事ハ

三國... 富士山... 縁起云孝安天皇九十二年六月富士山涌出
初雲霞飛來如靱聚無嶮阻後頂上五盤生其落
下跡作溪谷取郡名而曰富士山形似合蓮華絕頂
八葉層層到第八層中央有大穴窪々底湛池水色
如藍染物飲之味其酸而治諸疾池傍小穴形
三國... 後願乃山と
いひたり此教をたしむるより地獄乃出幸し身
とらぬる事ありきと云ふこと後願山に若獲也
目よりけいしるもぬめり後や三國と云ふ事ありし山流弁
此奇富士山高天の事と云ふこと駿河伊豆相模

富士山 縁起云孝安天皇九十二年六月富士山涌出
初雲霞飛來如靱聚無嶮阻後頂上五盤生其落
下跡作溪谷取郡名而曰富士山形似合蓮華絕頂
八葉層層到第八層中央有大穴窪々底湛池水色
如藍染物飲之味其酸而治諸疾池傍小穴形

似初月穴中或燃出黑烟雨土沙或白雲金光映徹
現鬼神形赤黑色表和三年季春垂珠簾雨玉
四方貞觀五年秋白衣神女出現雙立舞遊時火
炎揚有圓光即祭之号火御子古老傳曰昔大
網里有老翁孀共居翁愛鷹鳥孀飼大後任乘
馬里作其為業竹節中得一女其長一寸餘奇之
果衣綿養之經十六月漸長成能行歩容白端嚴
言語和雅于時天子詔諸國撰養女令獻之采女使
者至駿河國富士郡乘馬里宿老翁宅終夜有
光使者怪問曰何故道夜燃火哉答曰我女之光
彩也使者窺之其女甚美也於是謂曰天子求女

神也俗曰道祖神也祖者餞送所祭之名也

投其杖令解曰神道本護摩同行支陰陽之故
ヲ以テ行支大事也杖ハ心ヲ指テ推テ杖則不動一步
其心有千里万里外也投ト云ハ弃テ去テ本分道也
唐風俗通云共工氏之好遠遊故其死後祀以為

祖神 漢語抄云道祖同道神

鳥居 寶基本紀說云其在西者言鳥居 鳴訓

又稱知門 一說云取無名雉止于湯津梢之義

一說云居當作井表天真井之義

一說云鳥居表天字或高華表同義

一說云上古之神門也 奇乃心甘列内

鳥

あつらひりこ此白ねは使鳥と頼てとありん 家陰

此奇頼鳥とよめるや 頼鳥 神異記云越列

雪深国也其国幸氏於四極山穴中得鳥獸

或雞形或狗猫類是雷獸雷鳥也至極陰雷

因陰下成鳥獸雷以陽發動陰以伏靜之故

私云雷頼音同故この鳥とよめるはこれ

此雷獸鳥以頼乃鳥と定てん事は此の

誠雷獸鳥とよめるはこれとよめる奇の類

あつらひりこは及子 後鳥羽院御奇

白山乃ねは陰からあつらひりこは頼れ鳥か

蹤相續尋其所由地勢自爾又有臺嶺五寺禪
客比肩天山一院定侶連袂是則國之室民之梁
也伏惟我朝歷代皇帝留心佛法金刹銀臺
擲比朝野談義龍象每寺成林法之興隆於是
足矣但恨高山深嶺之四禪客幽藪窮岩希
介定賓實是禪教未傳住處不相應之所致
今准禪經說深山平地尤宜修禪空海少年日
好涉覽山水從吉野山南行百更向西去兩日程
有平原幽地名曰高野計當紀伊國伊都郡南
四面高嶺人蹤絕蹊人思上奉為國家下為
諸修行者及夷荒數聊建立修禪一院經

中有誠山河地水是國王之有也若比丘受用他不許物
即犯盜罪者加以法之興廢悉繫天心若大若小不
敢自由望請蒙賜彼空地早遂小願然則四時
懃念以答雨露之施若天恩允許請宣付所
司輕塵宸宸伏深悚越沙門空海誠惶誠
恐謹言云々

十四

花衣のうたふももておれ此個の月とあふよ
詞書ニ志意法師いさへ出家しん
時よ粉川乃親音まきしんて
りりゆりてりれりあそふ家いりりり
佛は修行して彼をとりゆりりりりり

内津よりかきありしなりと云

紅葉洞大和の記に未劫紅葉洞六多武峯此

異名之由而記しんんん則多武峯乃答ふ所

乃同く之なり意は師も多武峯此住侶也

父新前守懐平女祭主輔親乃女也

粉川観音 元亨釋書北八卷云

粉河寺者寶龜元年建故老傳言紀別那賀

郡有獵者姓大伴名孔子古常棲山谷屏身樹

上夜窺猪鹿而射之山中有光大如盤伴氏驚

怖疑怪即下樹欲見光處進去髪鬚無定所

如是現光三四夜伴氏熟見乃知其地猛省曰吾

非宿因幸逢瑞光便就光處結菴又思安得佛像

營精舍居未幾有一童子乞宿伴家許之童悅

語曰家主有何所須我願加助報宿託恩伴氏語

瑞光事曰我此地思安佛像未得佛工耳童曰我是

杜工家主若許願効小伎伴氏大悅曰我有三願刻

像一為法界有情二我息任奥列吏途路憂遠願

安穩還郷伴氏延童見菴所童曰我於此菴中一七

日刻像其中間願莫未見功畢吾往告伴氏諾去入

菴閉戸至第八曉聞叩門聲伴氏出見無人乃詰

菴金色觀世音像千聲儼如而不見童伴氏喜

恠自此投弓矢供像精修其後河内法河郡有佐

大夫者一子沉痾萬醫拱^{カニク}手百童子來舍大夫詰病
子事^ツ童曰我試^シ咒^シ之即誦大悲陀羅尼^ニ病立愈父
母大喜^ニ略^シ童^ニ不受^テ唯取^テ一箸筒而出大夫送^ラ門
曰息意深不知^テ謝^ル所任^レ何處屢^ニ通^シ音問答曰我住
紀勿那賀郡風市村粉河寺^ヲ詰^リ已^ニ辭^シ去^ル不^レ幾大夫
亭^ニ婦^ニ子^ニ向^テ彼^ニ至^リ風市村無^シ粉河寺者^ヲ踞^テ顧^リ視^ス
傍有^シ澗^ニ且^ニ東西^ニ沿^テ流^ル而下^リ河水甚^ニ白^ク如^シ粉^ニ將^テ見^ル林
中^ニ有^シ一^ノ宇^ヲ開^テ戸^ヲ無^シ人^ト便^ニ思^フ念^ス恐^ク是^レ軟^ク未^レ決^ス偶^ニ日^ニ已^ニ沒^ス
體^ニ勞^テ疲^レ閑^テ戸^ヲ而^テ入^リ無^シ火^ト燭^ト雖^モ不^レ見^ル像^ヲ以^テ其^ノ佛^ノ宇^ヲ採^ル
花^ヲ置^テ元^ニ而已^ニ衆人共^ニ困^ニ睡^ス中夜^ニ像^ノ前^ニ燈^ヲ益^シ自^ラ然^ル點^ス
火^ヲ堂^内赫^ク奕^ク大夫^{驚^キ起^リ見^ル之^ノ千^手大悲^{宛^ニ然^ル近^ク看^ス}}

童^ノ取^テ取^テ箸^ヲ筒^ニ挂^テ施^ム無^シ畏^ル之^ノ臂^ニ也^ト即^チ知^ル童^ノ子^ノ此^ノ像^ノ之^レ
應^ニ化^ス感^テ嘆^ク敬^テ禮^ス普^ク告^シ回^リ來^リ於^テ是^ニ伊^都郡^{澁^田村^田田}
家^ノ寡^婦聞^テ此^ノ事^ヲ捨^テ住^宅改^テ精^舎舍^ヲ爾^來靈^應日^ニ
新^ニ

五 松

此^ノ奇^ハ松^ノ弁^山台^ニま^りり^と山^祇と^まり^と也^ト
み^てく^く 沛^幣也^ト 之^ノの^ハ分^リニ^ニ 亦^ニ分^リニ^ニ
山^祇 日本^記神^代卷^曰伊^弊諾^尊斬^斬遇^突智^命
為^五段^此各^化成^五山^祇一^則首^化為^大山^祇二^則
身^中化^為中^山祇^三則^手化^為麓^山祇^四則^腰化^ニ

為正勝山祇五則足化為ニサカク 雉山祇ニキ
 中山祇山腰也正勝謂山高ニキ 雉山ニキ 雉鳥名ニキ 教系之義ニキ
十六 いふに成りて身もさるる所は神代の山に松ありて天ニキ 道ニキ
 川の流れば神領乃本に神社造宮乃ニキ され
 なるに伐取事禁制ニキ されて松此の峯より
 世の月ひらぬ事と思ひよるるに
 神代松乃松木善伐されし世の取用事あり
 中へ心あり

峯

十七 六月の成りて身もさるる所は神代の中の色ニキ
 峯
 陶淵明四時之詩より

春水満四澤夏雲多奇峯秋月揚明輝冬嶺
 秀孤松

十八 君代りりかきりかきり金其のなるに

金峯山金 聖武帝創東大寺鑄一千有六文
 那銅像多聚金為薄此時冬朝未有黄金帝
 詔良辦法師曰傳聞和加金峰山其地皆黄金也
 師祈金剛藏王得金資銅像薄不亦宜乎并
 入金峰山持念夢藏王告曰此山黄金不敢自恣
 也下畧 神代の徳よりハ赤勒出世の曉金峰山
 乃金と地よきくしるるこれハ久し
 事ハ神代の世と行りし神代より

凡位を以てしるは是れはつらむるの身は杖を以てしるは
山つらむる事名取也と一説あるは名取とては
由方葉必ぬと云うは杖のつらむる則ち山と云うは
あり奇の心むしむる身と序奇よりり方ある獨
身のつらむるつらむる身と云うは杖のつらむる
ありては杖のつらむる杖のつらむる杖のつらむる
むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
と云うは杖のつらむる杖のつらむる杖のつらむる
と書誤れは杖のつらむる杖のつらむる杖のつらむる
初より杖のつらむる杖のつらむる杖のつらむる
杖のつらむる杖のつらむる杖のつらむる杖のつらむる

九
行李のつらむる杖のつらむる杖のつらむる杖のつらむる
山つらむる事名取也と一説あるは名取とては
由方葉必ぬと云うは杖のつらむる則ち山と云うは
あり奇の心むしむる身と序奇よりり方ある獨
身のつらむるつらむる身と云うは杖のつらむる
ありては杖のつらむる杖のつらむる杖のつらむる
むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
と云うは杖のつらむる杖のつらむる杖のつらむる
と書誤れは杖のつらむる杖のつらむる杖のつらむる
初より杖のつらむる杖のつらむる杖のつらむる
杖のつらむる杖のつらむる杖のつらむる杖のつらむる

此等の心ありしを春の御神八天下補佐り
 長あれし大匠家之御皆藤氏御流々りて
 あらまねれりしを御せしむるにその心
 奇也又つてありしを御せしむるにその心
 なるにその心ありしを御せしむるにその心
 たりしを御せしむるにその心ありしを御せしむるにその心
 けりしを御せしむるにその心ありしを御せしむるにその心
 悔しむるにその心ありしを御せしむるにその心
 たりしを御せしむるにその心ありしを御せしむるにその心
 天は凡そなるも多しなりしを御せしむるにその心
 たりしを御せしむるにその心ありしを御せしむるにその心

大宮遠る思ふもやとて梅養へて春日す
 宮といふに細原云 藤人乃住家不ふ日たけし
 たりしを御せしむるにその心ありしを御せしむるにその心
 新ハ日るにその心ありしを御せしむるにその心
 たりしを御せしむるにその心ありしを御せしむるにその心
 たりしを御せしむるにその心ありしを御せしむるにその心
 たりしを御せしむるにその心ありしを御せしむるにその心
 たりしを御せしむるにその心ありしを御せしむるにその心
 たりしを御せしむるにその心ありしを御せしむるにその心
 たりしを御せしむるにその心ありしを御せしむるにその心
 たりしを御せしむるにその心ありしを御せしむるにその心

一説 親林の葉云々より只更本行元只云字 訛誤
一説 海舟の舟の世にありしより一説に地り相付也
一説 海舟の舟の世にありしより一説に地り相付也
一説 海舟の舟の世にありしより一説に地り相付也
一説 海舟の舟の世にありしより一説に地り相付也

一説 親林の葉云々より只更本行元只云字 訛誤
一説 海舟の舟の世にありしより一説に地り相付也
一説 海舟の舟の世にありしより一説に地り相付也
一説 海舟の舟の世にありしより一説に地り相付也
一説 海舟の舟の世にありしより一説に地り相付也

豊田頼 一説に地り相付也
一説に地り相付也
一説に地り相付也
一説に地り相付也
一説に地り相付也
一説に地り相付也
一説に地り相付也
一説に地り相付也
一説に地り相付也
一説に地り相付也

此等 前漢司馬相如故事
蒙求卷下云 前漢司馬相如字長卿蜀郡成都

まじらふはてしなくいふるんをたのむれば
此等しよしてよも多敷定らるるもあつて
さねるるも一奇れありしに
軒の雨しるしをさるるもあつて
此等しよしてよも多敷定らるるもあつて
空階雨滴萬里而卿園何在落葉窓深
此等しよしてよも多敷定らるるもあつて
又海風蘭の巻よふらるるもあつて

共
思ひの心も信よまらるるもあつて
此等しよしてよも多敷定らるるもあつて
家長

神社考五卷云安倍清明究天文役使土神將妻畏
職神形因咒以置十二神干一條橋下有事時呼而
使之自是世人占吉凶于橋邊則神必託人以告云
此事世の人心を安んずるに相叶ふ也又
綱鑑大全五十四云邵雍與客叢步天津橋上橋在河南府
聞杜鵑聲悵然不樂客問其故雍曰洛陽舊無杜
鵑今始至天下將治地氣自北而南將亂自南而北
今南方地氣至矣禽鳥飛翔得氣之先者也不

二年上用南上作相多引南人專務慶更天下自此多
事之至是雍言果驗云々此心ハ天津橋のりりりり
時鳥と云々一郡康節の國此礼ハ一と云々
好一と云々一り信礼古と云々一り事と云々
一と云々一り信礼古と云々一り事と云々
一と云々一り信礼古と云々一り事と云々

也日本記二十八卷天武天皇之部云臣今日出家為
陛下欲修功德天皇聽之即日出家法服因以收私
兵器悉納於司壬午入吉野宮時大納言蘇我
兄臣右大臣中臣金連及大納言蘇我果安臣等

送之自荒道返或曰虎著翼放之是夕御嶋宮癸
未至吉野而居之 此等と云々一り事と云々
也山ハ云々一り事と云々一り事と云々
奇ハ云々一り事と云々一り事と云々
ハ云々一り事と云々一り事と云々

開

史記評林卷之七十五孟嘗君列傳云孟嘗君名
是ハ孟嘗君ノ事ト云々一り事ト云々

史記評林卷之七十五孟嘗君列傳云孟嘗君名
如姓田氏文父曰靖郭君田嬰田嬰者齊威王少子
而齊宣王庶弟也 昭王即位以孟嘗君為秦相

ついでに... 中... 此... ぬ... 人... なる... たり... され... あり...
き... なる... たり... あり...

愚索能因奇能の芳事... なる... たり... あり... 一應...
... 奥... なる... たり... あり... なる... たり... あり...
... 奥... なる... たり... あり... なる... たり... あり...
... 奥... なる... たり... あり... なる... たり... あり...
... 奥... なる... たり... あり... なる... たり... あり...

お中... なる... たり... あり... なる... たり... あり...
... 奥... なる... たり... あり... なる... たり... あり...
... 奥... なる... たり... あり... なる... たり... あり...
... 奥... なる... たり... あり... なる... たり... あり...
... 奥... なる... たり... あり... なる... たり... あり...
... 奥... なる... たり... あり... なる... たり... あり...
... 奥... なる... たり... あり... なる... たり... あり...
... 奥... なる... たり... あり... なる... たり... あり...
... 奥... なる... たり... あり... なる... たり... あり...
... 奥... なる... たり... あり... なる... たり... あり...

丁卯の年... 霜降... 鐘鳴... 郭璞註云... 霜降則鐘鳴故言知也物有自然感應而不... 可不為之... 此... 霜... 鐘... 鳴... 郭璞註云... 霜降則鐘鳴故言知也物有自然感應而不... 可不為之... 此... 霜... 鐘... 鳴... 郭璞註云...

原

此... 鐘... 鳴... 郭璞註云... 霜降則鐘鳴故言知也物有自然感應而不... 可不為之... 此... 霜... 鐘... 鳴... 郭璞註云...

山海經云豐山有九鐘季是知霜鳴郭璞註云霜降則鐘鳴故言知也物有自然感應而不可不為之此... 霜... 鐘... 鳴... 郭璞註云...

此... 應... 字... 此... 應... 字...

此... 日本記神代卷云天照太神以天秩田長田

此... 日本記神代卷云天照太神以天秩田長田

此... 日本記神代卷云天照太神以天秩田長田

此... 日本記神代卷云天照太神以天秩田長田

此... 日本記神代卷云天照太神以天秩田長田

此... 日本記神代卷云天照太神以天秩田長田

此... 日本記神代卷云天照太神以天秩田長田

此... 日本記神代卷云天照太神以天秩田長田

此... 日本記神代卷云天照太神以天秩田長田

此... 日本記神代卷云天照太神以天秩田長田

此... 日本記神代卷云天照太神以天秩田長田

森

松ありぬしをけりし一夜くちけり森の色つらなり曰

此奇ハ也野乃一夜に於て

神社考云天曆元年移立祠于北野九年三月

託江初比良社祢宜良種曰大内北野下夜生

松千本其所建社以可崇天満天神於是朝日寺僧最珍

與右京女子勳カラ天徳三年右大臣藤原師輔改

造大慶甚敬神威

